

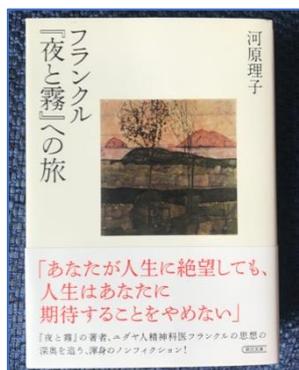
●長めの自己紹介

ほんとうは「みちこ」と読みます。「りこ」で通っていますが、1961年生まれ。

大学では社会心理学を専攻。1983年に卒業して、朝日新聞記者に。まだ男女雇用機会均等法もなく、女性は超少数でした。社会部記者が長く、編集委員、週刊誌 AERA の副編集長、甲府総局長などをして今春退社。ぽつぽつ書きながら、大学の非常勤や客員研究員などをしています。

30代で最初に書いた単著が『**犯罪被害者 いま人権を考える**』（平凡社新書 1999）でした。事件記者として取材していたわけではなく、ひょんなことから、私は、性暴力の被害者、やがて事件事故の被害者やご家族の話を聴くようになり、裁判を傍聴し、驚くことばかり。そんな当時の状況をまとめた本です。制度は今では大きく変わっています。私が一番衝撃を受けたのは、自分が「知ってるつもり」で、ちっとも知らなかったということでした。そして、「そっとしておいてあげるのが一番」と言いますが、必要な情報も知らされずに放っておかれて自分だけで回復せよ、というのは酷なことだと知りました。

その延長で、地下鉄サリン事件被害者の会の代表世話人の高橋シズエさんと有志の記者たちと、被害者は本当のところどんな体験をしたのか、嫌な取材、よかった取材はどんなものか、を聴く記者勉強会を、2000-2011年に主宰していました。その中間報告が『**〈犯罪被害者〉が報道を変える**』（岩波書店 2005、高橋さんと共同編集）。高橋さんのほか四人のご遺族の話と、記者たちの話を収めています。私自身は、聴くこと、語ることについて、深く考えさせられました。日本では手がかりがなくて、アメリカの大学のジャーナリズムスクールの被害者取材の講座を訪ねたことが転機になりました。この本は今も一部のメディア研修で使われています。



変えられない困難に直面した人たち、まわりで支える人たちの話を聴いているうちに、ヴィクトール・フランクル(ナチ強制収容所の体験者で精神科医)の言葉を杖のようにしている人たちが日本にたくさんいることに気づきました。彼の著書『夜と霧』はなぜこんなに読まれたのか、彼はどのような体験をしたのか。新聞連載を足がかりに、ゆかりの地を訪ねて書いたのが『フランクル「夜と霧」への旅』(2012 平凡社、2017 朝日文庫)。彼が唱えたロゴセラピー(生きる意味を見つけるのを手伝いする思想)に惹かれた私は学び続けて、昨夏、A級ロゴセラピストになりました。

他に、『戦争と犯罪 石川達三を読み直す』(岩波新書)などを書いています。

●お話しする予定のこと

1. なぜ、「性暴力被害」の取材を始めたのか
2. 当事者の話から私は何を学んだのか
3. “常識”を問う=「モンダ主義」(※□※□とは、こういうもんだ!)を変える難しさ

「性被害についての認識」の変化の三段階

- A ごく一部の特殊な出来事ではなくて、たくさん起きているらしい。潜在化している
- B 「大したことない」わけではなくて、深刻な影響があるらしい
- C 司法の”常識”、社会のモンダ主義は、誰が作ったものか。これでいいのか。

AとBは、比較的早く浸透しました。

私のいた新聞社では、性犯罪の表現ルールを変えたり、子どもに対する性的な事件を「いたずら」と呼ばない、ということは1990年代に実現できました。21世紀に性犯罪の厳罰化は進み、法廷での被害者保護策などは進みました。被害者の相談先も増えました。

けれども、Cは……。さまざまな支援が少しずつ進み、見えなかった被害(例えば家庭内での性被害)が表に出てくるようになって初めて、議論のスタート地点に立ったような気がしています。

この3年間の変化はとても大きかった。けれどもそれでようやくスタート台だと思います。

#### 4. 私が今考えていること Trauma Reporting の可能性

取材者がトラウマについて理解して、自分が受けるダメージや、必要な自己コントロールについて知った上で、傷ついた人や偏見にさらされる可能性がある人たちの話を(ステレオタイプな見方をやめて)聴き、なおかつ公正に報道するための手がかりを構築できないか。

この項は、ぜひ皆さんのお知恵を借りたいところですが、時間があればふれる程度になると思います。

#### 参考

『惨事ストレスとは何か 救援者の心を守るために』松井豊・著 河出書房新社

『その名を暴け』ジョディ・カンター、ミーガン・トゥーイー著、古田美登里訳 新潮社

ワインスタインの女優や従業員へのセクハラを最初に報じたNYタイムズの記者たちの本。

いかに困難な取材をしたか、わかりました。